

グループ2

私たちにできること ～飢餓に苦しむ人々のために～

飯田紗也加 木村彰伸 小松崎多映
指導者：櫻井友裕教諭 植田恵津子教諭

要旨

現在、世界では約 8 億人の人が飢餓に直面している。彼らの多くは発展途上国で暮らしている人である。そのような人々のために先進国に暮らす私たちに何か出来ることはないかと考えた。私たちはその調査の中で TABLE FOR TWO international という NPO 法人を見つけ、その団体が行っている飢餓への支援に私たちも参加した。その結果、土浦一高で飢餓への支援金を募ることができ、そして、生徒たちの飢餓への意識を高めることが出来た。

キーワード: 飢餓、支援

What we can do ~for people suffering from hunger~

Abstract

Now all over the world, about 800,000,000 people are facing a lack of food. While, this number is said to be decreasing compared to the past. Still many people are hungry especially, those living in developing countries. We, people who are living in developed countries, are responsible to help those people. First, we took a survey in Japan, Australia, Malaysia, and Singapore. As a result, we found many of the subjects want to support them. Second, we participated in a project called TABLE FOR TWO international (NPO) at four local schools where bread was sold. This activity raised students' awareness of world hunger. A portion of the cost of the bread was donated to seven countries suffering from hunger. In the future, we want to continue this program spreading where people can easily take part to stop hunger.

Key words: Hunger, Support

○テーマを決めた動機

今、私たちは生きていく上で必要な量以上の食料を得ることができ、さらに学校に通うこともできる。しかし、世界にはどれだけ働いても生きていく上で必要な食料さえ得られない人々がたくさんいる。そのような飢餓状態にある人々は、減ってきていると言われているが、今でも約7億9500万人の人々が飢餓に苦しんでいる。そのような飢餓に苦しむ人々の手助けをしたいと思い、このテーマを決めた。

○仮説

飢餓の支援をしている団体はたくさんあるが、その多くは募金による支援である。そのため、支援をした本人は募金をしたという満足感が得られないので、支援をしてくれる人は限られてしまう。そこで、ただの募金という形ではなく、何かをしたついでに支援ができるといった仕組みであれば、より多くの方が支援に協力してくれるのではないかと。

○調査方法

・インターネット

インターネットを使い、飢餓問題の解決に向けて現在どのような活動があるのかを調べた。

・街頭インタビュー

日本（筑波大学構内）、オーストラリア（タスマニア大学構内、タスマニアサラマンカ通り、シドニー市内）、マレーシア（マレーシア工科大学構内、KLCC内）で、通行人にインタビューを行った。

・支援活動

「株式会社栄パン」にご協力いただき、特定非営利活動法人「TABLE FOR TWO International」の活動を土浦第一高校、土浦第二高校、土浦第三高校、牛久栄進高校で実施した。

・アンケート

土浦一高1、2年生を対象に、支援活動実施前と実施後の2回アンケート調査を実施し、支援活動の前後で飢餓に対する考えがどう変わったか調査した。（3 ページ図 1、図 2 参照）

○調査結果

・インターネット

飢餓問題の解決に取り組む様々な団体・組織を見つけた。支援の仕組みも様々で、支援金を集めているところもあれば、食べきれない食料を集めているところもあった。いろいろな支援方法があるということがわかり、支援の仕方は一つではないことが確認できた。

・街頭インタビュー

〈日本〉計 11 人

Q1 世界で9人に1人が飢餓状態にあることを知っていますか？	はい 5 人 いいえ 6 人
Q2 そのように苦しんでいる人たちに何かしてあげたいと思いますか？	はい 8 人 いいえ 3 人
Q3 今までに募金など飢餓に対する支援をしたことがありますか？	はい 6 人 いいえ 2 人
Q4 何が飢餓の原因になっていると思いますか？	人口の増加、経済や政治の問題、食糧の不平等、貧困、教育など

〈オーストラリア（タスマニア）〉計 20 人

Q1 食べきれずに残ったら捨てますか？	はい 2 人 後で食べる 16 人 残さない 1 人 場合による 1 人
Q2 レストランで食事すると寄付ができる活動に参加したいですか？	はい 17 人 いいえ 1 人 外食しない 2 人
Q3 今までに募金などをしたことがありますか？	はい 18 人 いいえ 2 人

〈オーストラリア（シドニー）〉計 30 人

Q1 食べきれずに残ったら捨てますか？	はい 2 人 後で食べる 26 人 残さない 1 人 場合による 1 人
Q2 レストランで食事すると寄付ができる活動に参加したいですか？	はい 19 人 いいえ 7 人 場合による 1 人
Q3 今までに募金などをしたことがありますか？	はい 28 人 いいえ 0 人

〈マレーシア〉計 11 人

Q1 今までに募金をしたことがありますか？	はい 10 人 いいえ 1 人
Q2 レストランで食事すると寄付ができる活動に参加していますか？	はい 10 人 場合による 1 人
Q3 あなたの国に飢餓の支援を行っている企業はありますか？	はい 11 人 いいえ 0 人
Q4 あなたの国には飢餓があると思いますか？	はい 6 人 いいえ 5 人
Q5 飢餓の原因は何だと思えますか？	経済 6 人 意識の低さ 2 人 雇用問題 2 人 など
Q6 飢餓の解決方法は何だと思えますか？	チャリティ 4 人 募金 4 人 など

このインタビューの結果から日本人は海外の人に比べて飢餓に対する意識が低いということが分かった。日本人にとって飢餓という問題はあまり身近に感じられないために飢餓に関心をもてないのではないかと考えた。また、マレーシアで飢餓の解決方法について尋ねたところ、募金と答えた人と同じ数の人がチャリティと答えたことが予想とは異なり、印象的であった。また、オーストラリアの人は食べきれなかった食材を捨てるのではなく、後で食べるという人がほとんどであったことも印象に残った。日本と海外の3ヶ所でフィールドワークをすることでその国ごとの文化や考え方の違いなどが実際に分かったため、とても有意義な活動であった。

・支援活動

TABLE FOR TWO の活動※を4つの高校で行った。栄パンにご協力いただき、ヘルシーメニューであるざらびー(写真1参照)とBPMサンド(写真2参照)の2種類のパンを2016年12月19日～23日、2017年1月9日～20日の3週間販売した。その間、ポスターや張り紙などで宣伝を行った。その結果、12,740円の寄付をすることができた。

※TABLE FOR TWO の活動

先進国の肥満問題と発展途上国の飢餓問題を解決することが目標。レストランや事業所食堂で対象商品を購入することで1食につき20円が寄付される。その20円が開発途上国の子供の学校給食を作るために使われる。その学校給食は1食20円で作ることができるので、1食購入すると1人分の学校給食を届けるこ

とができる。ウガンダ、ルワンダ、エチオピア、タンザニア、ケニア、ミャンマー、フィリピンの7ヶ国に支援をしている。実際に団体の代表者が現地で支援の様子を確認し、facebookなどのSNSに投稿しているため、支援者が支援の実態を知ることができる。ヘルシーメニューの他にも様々な新しい試みを実施している。日本の組織だが、海外の企業もこの活動に協力している。実際に販売された商品↓



写真1 ざらびー

写真2 BPM サンド

実際にパンの販売を行うと、栄パンさんの多大なご協力のおかげで予想以上に寄付金を集めることができた。しかし、実際に飢餓への支援のつもりで買った人があまり多くはなかったため、広告不足であったと感じた。

・アンケート

〈活動実施前〉計464人

Q1世界の9人に1人が飢餓に苦しんでいることを知っていますか？ →はい 135人 いいえ 329人

Q2飢餓の支援をしたいと思えますか？

→はい 408人 いいえ 56人

〈活動実施後〉計520人

Q1世界の9人に1人が飢餓に苦しんでいることを知っていますか？

→はい 313人 いいえ 208人

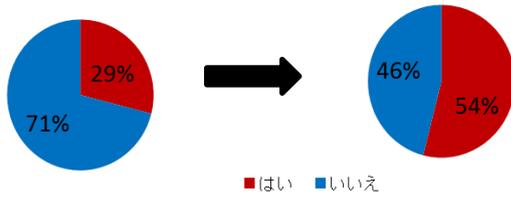
Q2飢餓の支援をしたいと思えますか？

→はい 432人 いいえ 78人 無回答 10人

活動実施後は実施前に比べて飢餓について知っている人が約2倍に増えたことが分かった。また、飢餓の支援がしたいと思っている人は実施前も実施後も高い割合であった。よって、私達がPRすることで飢餓の情報を持つ人が増えたため、私達が活動することで少しでも人々に飢餓のことを知ってもらえるということが分かった。

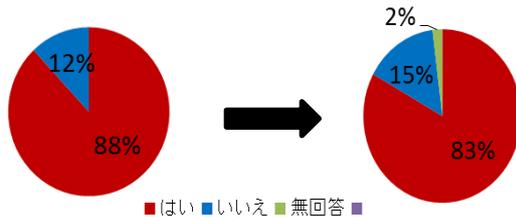
Q1 のグラフ 図1

Q、世界の9人に1人が飢餓で苦しんでいることを知っていますか。



Q2 のグラフ 図2

Q、飢餓に対する支援をしたいと思いませんか。



○考察

これまでの研究で飢餓に苦しむ人々のために私たちが今できることは少ないけれど、その中でも私たちだからこそできることがあるのだということが分かった。また、何かをしたついでに募

金ができたら、支援に参加しようとする人が増えるのではないかとこの仮説に関しては、調査の結果、増えたわけではないが、少なくとも飢餓について関心を持ってもらうことはできたのではないかと思う。そして、支援をしたいと考えている人は高校生でもたくさんいるが、実際に行動したことがある人は少ないということが分かったため、今後は、普通の人でも簡単に支援に参加できるような仕組みを考えていきたい。

○協力

TABLE FOR TWO International
栄パン

○参考文献

国連 WFP ホームページ <http://ja.wfp.org/hunger-jp> 2017年1月参照

TABLE FOR TWO 公式サイト

<http://jp.tablefor2.org/aboutus/organization.html>

2016年11月参照